

解放の神学とは、1970年代から90年代にかけてラテンアメリカの教会を中心におこった、実践神学を指します。

カトリックの司祭である G.グティエレスなどによって提唱され、福音を経済的・精神的・政治的・社会的な、あらゆる抑圧からの解放であると考えます。

その考えの神学的根拠は、旧約聖書にあるエジプトからの脱出やカナンでの土地取得、さらに大勢の預言者による権力の批判の箇所だとされます。さらに新約聖書においては、イエス様が祭司など権力を持った人たちと対決している場面や、貧しい人を解放するという視点で神の国の福音を宣べ伝えている箇所も、その根拠であると考えられています。

ラテンアメリカの教会では、これらの箇所のメッセージを学ぶ運動が起こりました。

解放の神学はその後、他の地域でも成立していきます。例えばアジアではその迫害の体験をもとにした神学が生まれます。韓国の「民衆の神学」(徐南同)がその一例です。また南アフリカでは国内的な植民地問題、アメリカ合衆国においては「黒人神学」や、女性の解放のための「フェミニスト神学」などが発展してきました。

しかし一方で、わずかな聖書的根拠を拡大解釈して神学を展開しているという批判もあります。特に革命を正当化する根拠として、聖書箇所を用いることに危険性もあることから、ヴァチカン教皇庁や神学者の中には、これらの運動を批判的に捉える動きもあるようです。

しかしながら解放の神学は、自分の置かれた立場で聖書を読み、解釈し、神学するということの大切さを教えてくれるものです。

次回は「割礼」です。お楽しみに。



「ベトザタの池で中風患者を癒すキリスト」  
ジョバンニ・ドメニコ・ティエポロ  
(1727~1804年)

イエスは言われた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。その日は安息日であった。

(ヨハネによる福音書5章8~9節)

